



現代社会における青年期の問題（I）：
職業選択と階層移動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003926

現代社会における青年期の問題 (I)

——職業選択と階層移動——

野村哲也

- 一、青年期の課題としての職業選択
- 二、職業選択問題の三つの分析視点
 - (1) 社会構造的視点からの関連枠
 - (a) 職業階層
 - (b) 社会移動の可能性—成功の型の変化
 - (2) 文化背景的視点
 - (3) 個人的心理的視点

一、青年期の課題としての職業選択

青年期を「子どもから大人への過渡期」ないしは「成人への準備期」とみる捉え方は、今もなお青年期研究の有力な前提となつているが、その視点から見るととき青年期における職業選択は、配偶者選択と共に、社会の存立と存続にかかわる根源的な問題性を含んでいる。何故なら、(1)各人が興味や能力に応じた職業に就いて、社会的分業の一端を担い、(2)よき家庭を作つて次の世代を育成するという事は、成人としての最低限の資格、ないしは

社会的役割であり、職業や配偶者の選択は、そうした成人としての役割をよりよく果す為の過程だからである。R・J・ハウイガーストや、L・コール或いは、D・ゴットリーブ等が、青年期の発達課題としてあげている種々の事は、結局この選択を過ちなく、主体的に行なえるような能力を発達させる事に外ならないと云つてもいいだろう。更に又、この問題は、「就職」と「結婚」という一見ありふれた事ながら、同時に青年にとつて、最も大きな関心事として、現実には焦点化されている問題でもある。ところが、この選択はそのメカニズムに於ても、内容に於ても、「現代社会に於ては次第に困難性ないしは問題性を増しつつある。その理由として考えられる事は、第一に冒頭に述べたような青年期の捉え方が、もはや通用しなくなつたのではないかという事。第二に社会変動の激しさが、直接青年期の職業選択に与える様々の impact —— 例えば、価値意識の変化、階層構造の変化等——が多い事、第三に青年期と特に関係の深い教育制度に逆機能的要素が顕著になつて来た事である。

いわゆる、伝統的社会にあつては、成人になるとは既存の成人社会への適応ないしは、同化を意味し、青年に対する成人のコントロールや関与は、比較的自然な且つ連続的なプロセスの中に行なわれ、両者の間の葛藤やギャップは比較的少なかつた。子は父の職業を継ぐ事が多く、職業に必要な知識や技能は日常生活の場で、自然な形で修得されたし、配偶者の選択も生活空間が狭く、互によく知つた一次集団の中では比較的容易であり、更には又、適当な時期になれば成人達が、仲介(arrange)してくれる為、青年達は大きな困難も情緒的不安もなく、通過儀礼的な一定の手続きを経て、成人社会へ入り込む事が出来た。

然しながら、こうした事情は都市化、機械化、巨大機構化を特徴とする、現代産業社会に於ては、全く様相を一変する。本稿の主なテーマである、職業選択について云えば、先づ職業の細分化や、新しい職業の発生によつて、子が親の職業に就く機会は少なくなるのみならず、高度な知識を必要とする専門化が進むにつれ、親が子に職業的知識や技能を伝達する事は不可能になり、家族のもつていた教育機能(特に職業教育的なもの)は、学校

教育にゆだねられる事になった。然し同時に、子どもが親から離れて、同輩集団の中で生活する時間が多くなる
と、成人よりも同輩に準拠性を求めるようになって成人から離れ、その規範の伝達やコントロールが充分でなく
なる。E・A・スミスや、J・S・コールマン等最近の研究によれば、青年期は単に成人と幼児期とに狭まれた
周辺人 (marginal man) 的なものとのみ見るべきでなく、それと並ぶ第三の時期であり、独自の文化や地位体系
をもった青年社会 (adolescent society) が形成されつつあることがうかがわれる。この事は特に価値意識におい
て、成人とは非常に異なったものが、青年達の間で形成されつつある事を意味するのであって、就学年数の増大
と共にますますその傾向は大となるであろう。そしてこの価値意識のギャップは、職業選択をめぐっての社会的
な問題や親子の葛藤をひき起こす要因となるのである。

学校教育はこのようにして、次の世代である青年の社会化に、充分な機能を果していないのみならず、職業的
教育を通しての人間能力の社会への配分 (manpower allocation) —— 個人の側から見れば、これは職業選択であ
る。—— という機能の面でも最近では次第に逆機能的なものを生み出しつつある。

その一つは、(1) 最近の科学技術が急速に進歩した事と、職業が複雑化し専門的に分化した為、職業のすべてに
対して、オールマイティな技能や知識を与える事は、難しくなりつつある。(それに対処する方法として後期
中等教育の多様化がはかられているが、その効果は疑問な点が多い。) 然し更に本質的な問題は、(2) ある一定の年
限で卒業し、しかもその卒業という人為的な区切りによって、集約的かつ尖鋭化された形で、職業の選択を行な
わねばならぬという制度的な側面、及び(3) 就学年数、すなわち学歴が職業選択を限定させる働きをするという事
である。特に専門性の稀薄な職業 (例えば書記の仕事) では、学歴にウエイトがかかり、個人の興味や修得した
技術に応じた選択という事が影を薄め、大学卒か、高校卒かといった、学歴階層的なもの、更には学校格差が職
業選択を左右する傾向が強いのである。

二、職業選択問題の三つの分析視点

(1) 社会構造論的視点からの関連性

(a) 職業階層

「職業選択」を論ずる社会構造論的な視点に立つた枠組としては、専門化された職業階層の存在と、その階層間の移動の可能性が主要なものとしてあげられよう。職業分化が未発達で、殆んどすべての成員が同質的な農耕作業に従っているような、未開社会等では職業選択はあり得ない。又或る程度の職業分化が進んでも、それが階層的構造をもたないものであれば、職業選択の動機は階層移動的なものでなく、個人の興味を主体とした比較的単純なものであり、特殊な興味や才能をもった者以外は、わざわざ父から受け継いだ職業ないしは、伝統的な職業を捨てて他の不慣れた職業に就こうとする欲求は生じないであろう。

更に又、高度に分化され階層化された職業階層が存在したとしても、それだけでは職業選択の問題は起こらない。例えばカースト的規制の強いインドでは、階層化したそれぞれの職業には、つくべきカーストが定まっており、あるカーストに属している者は、他のカーストの占める職業につく事は出来ない。我が国の徳川期における士農工商の身分階層的な区別も、それに近いもので、その間の社会移動は特殊な場合を除いて、殆んど自由ではなかった。すなわち、分化した職業階層が存在しても、社会移動が可能でないところでは職業選択は起こり難い。職業選択が問題となるのは、社会移動の機会が自由であり、且つ多様に専門化され、階層化された職業をもつ現代産業社会においてである。

ところで、社会的分業という事自体は、本来社会階層的意味はもっていない。狩をするものと、農耕をするものとの本質的な階層差はない。しかし職業——(労働内容やポジション)——が次第に分化して来るに従って、

(1) その社会において機能的に他より重要なポジション

(2) 他とくらべて本質的に余り面白くない仕事

(3) 他の仕事より可成り多くの訓練を要する仕事

(4) その仕事を遂行する為には、勤勉さや責任を必要とするようなポジション

等が生まれて来る。こうした仕事やポジションは、その不愉快さや、要求される訓練や緊張の故に、なり手が少ないとか、高度な能力が必要な為、誰もがなれるとは限らない等の理由から、人々がそれ等の職業やポジションに就こうとする動機を与えるような、何らかの手段を講ずる事が社会にとって必要となるであろう。その手段として先づ考えられる事は、それ等の職業に高い報酬（収入・威光・権力・便益等）を用意する事である。一般に責任性・倫理性の強い職業や、社会的緊要度や貢献度の高い職業には、高い威光や収入が約束されるであろうが、更にそれぞれの社会のおかれた歴史的状况によつて、そのウェイトは異なる。国家的統一がすべてに優先する新興国において、統治的役割を果たす官僚や政治家に、高い報酬（収入と権力）が払われるのは当然であろうし、戦時においては、軍人が権力を持ち、工業立国がスローガンとされるところでは、技術者や実業家に高い社会的地位が与えられよう。又後進国において、文化水準を高める為には教育が重視される時、学者や教師には高い威信とかなりの収入が約束される。更に又、未開社会に多く見られるように、生産にまで呪術的な儀礼や祭祀が関与したり、祭祀が集団統一の重要な役割を果たしたところでは、呪術師や司祭には高い權威がはらわれたのである。

K. Davisによれば、このような収入・威光・権力・便益等が職業階層を生む主要因である。④もちろん彼の所説は需要——供給論（supply-demand theory）的な視点に立つものであつて、それだけで職業階層が決定されるものではない。四つの要素間の相対的ウェイトは、その社会の文化的背景、特に価値体系が影響するであろうし、又上述のような自然発生的な職業階層でなく、支配者が作為的、政治的に作りあげた階層、更には又、後述

表1 六大都市に於ける職業の格付けと知能指数

職業格付	知能指数					
		8 自営商工業主	117	17 デパートの店員	}	
1 大臣府県知事	131以上	9 労組委員長	}	18 保険勧誘員	93	
2 大学教授官		10 新聞記者		19 大工	}	
3 裁判官		11 小学校教師				20 理髪師
	12 住職	21 バス運転手	92			
4 大会社の重役	130	13 会社事務員	108	22 旋盤工	}	
5 医 師				23 漁師		83
6 官庁の課長	}	14 自作農	107	24 炭坑夫	}	
7 建築技師		15 巡査		25 道路工		82
		16 洋服仕立		26 露靴		}
				27 天磨		

するような情緒的、非合理的な要素も階層形成因となり得るだろう。いづれにせよ、以上の諸要因が関連し合って歴史的な変化を受けつつ、現代における職業の格付、すなわち、職業階層が成立するにいたった。そして今や確固たるものとして我々の社会生活を支配している。この事は端的に日常生活における名刺の交換にあらわれている。初対面の相手であっても、人々は交換した名刺の肩書きによって、ほぼお互いの応対の仕方が決まるのである。

日本の場合、たとえば、六大都市における職業格付けは表1のようになっている。^③

この順位は都市部での調査であつて、やや頭脳労働にウエイトが置かれてゐる為とも思われるが、知能指数による職業選択基準の段階と、ほぼ一致する。この事は後に述べる如く、職業選択の問題を偏らせる大きな要因となるであろう。更にその職業の格付けを行なうに当つて、考慮に入れた基準、並びにそのウエイトは、表2に示されるように、

1 社会的尊敬、 2 収入、 ③ 要求される教育、の順となる。

社会的尊敬が収入を上回る事は注目すべき事であるが、収入だけ多くても尊敬出来ぬ仕事のある事や、家格を重んじ、成金を伝統的に軽べつする風潮の残っている事を示すものであろう。もちろん社会的に尊敬される職業には、ある程度の収入が伴うものであるから、結局必

表2 職業の格付け基準

要素	社会的尊敬	収入	教育程度	社会的緊要度	特殊能力 必要とされる	倫理性 責任性と性	安定性	その他
重視度	24.2%	19.4	17.3	14.0	10.0	7.4	3.2	4.5

要以上の収入よりは、尊敬をという意味も含まれているだろう。又教育程度が第三に上げられて、特殊な能力よりも遙かに重視されているのは、頭脳労働を肉體労働より上位におく考えと共に、學歷主義的階梯を反映しているものと解される。しかしこうした順位並びに格付け基準は、最近の若い世代においては、大きく変りつつあり、それが青年達の職業選択基準に大きく影響しているように思われる。この格付け基準の変化は、デビビスの階層形成因が需要供給論的であるにせよ、合理性をもつたものであったのに対して、(1)非合理的ムード的要素が加わった事、(2)職業分化の多様性が、職業ないしは、ポジションの機能的重要性の比較を困難にさせた事、(3)特に日本の場合、學歷を軸とする、年功序列的な職業的地位階梯の色彩が強く、合理性、専門性がそれ程高くない事、(4)更に価値意識の上で職業・労働観や余暇観が変化して来た事等によると考えられる。

なおここで注意しなければならないのは、社会的地位ないしは階層と、職種と従事する産業との混同である。たとえば青少年に、「将来就きたい職業」を聞いた場合、よく一流会社の課長とか社長とかいう答えがあるが、そうした答えは職種ではなくて、将来の目標とする職業的地位である。職種としてならばセールスカ、経理か、労務管理か、技術かという区別でなければならぬ。まして課長とか重役とかは、これから就職しようとするものが、選択出来る職業でなく、彼等が平社会から順に昇進して行く地位階梯である。調査等でこれと類

似した回答が多いという事は、日本においては特殊な分野を除いて、未だ専門性は明確に意識されていないという事、及び青年達が職業選択に当って、将来どの程度の地位にまで昇進したいと思っているかという事、いいかえれば、社会移動に非常な関心がある事を意味している。更に又、高校普通課程卒業の就職者が、A貿易か、B薬品か、C織物かという選択を行なう場合、彼は決して職種を選んでいるのではない。どの会社に行こうとおそらく彼は書記的 (clerical) 仕事をするであろう。ここにおける彼の選択は会社の選択であって、本来の職業選択から云えば二次的なものである。そこでは初任給や会社の規模や、知名度、更には勤務地や会社の建物の美観といった、非常に現実的な要素や、ムード的な要素すら選択の基準に入ってくる。

そうした意味でもっとも非合理的な要素を含み、職業選択における基準をあいまいにしているのは、ホワイトカラー的職業の増大である。しかもホワイトカラー的職業は、かつて計画・管理等かなりの教育を要した頭脳労働的職業であり、名実共に旧中間層に代る階層的地位をもっていた。しかし今やホワイトカラーは増加し、その仕事は合理化が進むにつれて単純化し、単なる書記的仕事が殆んどをしめるようになった。にもかかわらず外面的には、専門的職業や管理的地位のものと比べて、上下の見分けがつかず、その威光を借りられる事や、ムード的魅力もあって、ホワイトカラー的職業を求める者が多く、そこに生ずる競争が、ホワイトカラー的職業を実質——機能的な重要性や仕事のむつかしさ——以上に優位にさせている。

現代では、職業階層において最上位のクラスに達し得る者は、非常に限られており、大部分は中間層、特にホワイトカラーという比較し難い階層に包括される。従って、初めから高いアスピレーションを持ち得ない普通の能力の人間にとって、学歴さえあれば一応安定した収入と、中間層的地位が与えられる為、職業階層的にはそれで一応満足し、それに代って職業選択とは本来無関係なオフィスの所在地や、会社の知名度による威光効果を求めるようになるのである。たとえば、丸の内や中之島周辺の一流会社に勤めているという事は、B・Gなどの補

助的事務員にとって大きな威光を与えてくれるものである。ミルズによれば、ニューヨーク五番街の専門店の売り子は、そのお客が上流階級が多いという事で、百貨店の売り子よりも優越感をもっているし、求人広告における条件の中に、エンバイヤステートビルの何十階かに事務所があるという事は、一つの魅力ある要素なのである。

こうした威光効果を示すものの中で、マスコミのもたらす知名度は、最近ますます影響力を強めている。ラザース・フェルトはマス・コミの機能の一つとして、地位付与の機能をあげているが、単にマス・コミに乗って名を知られる事が、個人の地位に大きな影響を与えるだけでなく、マス・コミに屢々登場する華やかな職業や、娯楽的産業、更には広告主の社名すらマス・コミを通して名を知られる事が一つのメリットとなり、職業選択の基準に影響を及ぼす。然も、こうした非合理的・ムード的な要素は決して無視し得ない。というだけでなく、職業意識の低い者にとっては、最大の選択基準とすらなる。なおこの他にマス・コミは労働観、余暇観等の価値意識の変化にも大きな影響力をもつが、それについては文化背景因のところで述べる。何れにせよ云えることは、伝統的な職業階層基準のみから、職業選択の問題を論ずることは出来ないという事である。

(b) 社会移動の可能性——成功の型の変化

志を立て郷関を出で、錦を着て故郷に帰る。事は、既に古くからいいならわされた言葉である。又孝経でも名をあげ道を行ない、もつて父母を顕わす。事は孝の終局の理想とされるなど、立身出世は階層社会において普遍的といつてもいい位強い願望であるといえよう。

しかしそれも社会移動の可能性、特にすべての人間に対する、機会均等ないしは門戸の解放を必須の前提要件とする。中国における科挙の制度（五八九年—一九〇四年）は幾多の変遷があつたにせよ、少なくとも、タテマエとしてはそうした条件を満す制度であつた。我が国でも奈良朝以来学問を修めて僧侶や学者になる事は、上昇移動の道であり、天平の昔、志を抱く者は難破の危険を冒しても中国に留学しようとしたし、身分階層の固定し

た徳川期においても、武芸と学問に優れた者は、拔擢登用を受けて破格の出世をする事も可能であった。もちろんこうした事は、何れも支配階級が統治の為の必要性から、統治に必要な分野での人材登用を目指したものであって、武芸なり学問なり彼等の重視した特殊な分野でのみ、社会移動の道が開かれていたのである。しかもそれすら甚だ狭い門であつて、普通の者には始めから考へる事すら及ばず、神童と騒がれるような、自他共にゆるすエリートにして始めて可能な事であつた。

我が国で少なくとも制度的に社会移動への道が解放されたのは、四民平等をうたう明治になつてからである。そして社会移動の可能性が開かれると共に、庶民の立身出世への欲求は、堰を切つたようにあふれ出る。中村正直の「西国立志篇」(一八七一年)がそうした志を抱く明治期の青年達にとつてのバイブルであつた事は、広く知られた事であらう。

ところでこうした明治の初期から大正を経て、少なくとも昭和の初期まで、立身出世や成功という言葉には、庶民にとつてもかなりの現実味があつた。今日の偉人や成功者の伝記はそうした時代に、平凡な、もしくは貧しい家に生まれ、刻苦奮励して遂に名を成すに至つたというパターンが、おきまりになつてゐる程である。しかもそのパターンは、日本がその間に示した著しい発展にふさわしく、多様なものがあつた。帝国大学を出て高級官僚となる事は、官尊民卑の風潮が強く、官吏の社会的地位の非常に高いこの国において、は社会移動の典型的なパターンであつた。又軍国主義国家として軍人の地位も高く、しかも職業軍人になるには、唯強い身体と、優れた才能のみあれば、学資も不要であり、下層の者にとつては非常に魅力ある社会移動の道であつた。更に資源の乏しいこの国では、早くから工業立国が重要視され、科学技術が尊重されたから、高度な科学的知識や技術を修める事も、又重要な社会移動への道であつた。のみならず大資本の力が、まだ小企業にまで影響を及ぼしてゐなかつたこの時代には、ミルズの云う、旧中産階級的な古い形の成功、すなわち小企業家型の社会移動の道も充分

開けていた。特に商業の世界では、商人に学問はいらぬとさえいわれ、年期奉公からノレン分け、事業の拡大と刻苦精励さえすればいくらでも産をなす道はあった。すなわち本人が社会移動への強いアスピレーションを持ち、努力さえすれば、それぞれの興味と能力に応じた、多様な階層移動が可成の程度に可能であった。その意味で日本は、優れて開放的な競争移動の国であったという事が出来よう。しかし社会が次第に巨大機構化し、組織の網がはりめぐらされて地位階梯が強固になって来ると、社会移動のパターンは次第に限定されて来る。

先づ技術が個人的な経験やカンでは役に立たなくなる程高度化し、次々と新しい方法が導入されたり、既存のものとは全く別の新しい産業が生まれる等、変化が激しくなり、又企業経営も大福帳的な方法では通用しなくなるにつれて、合理的系統的な知識や技術が必要となるだろう。しかもそれは専門的な教師による、学校教育を描いては修得が次第に困難となつて来る。のみならず現実に、高等教育を受けた者の、新しい分野や専門的職種において果した役割は大きく、上昇移動も又目ざましかった。とすれば、社会移動への欲求が教育への意欲を生むのは当然であろう。そして遂には学歴に対する盲信を生み「教育に対する欲求」は「学歴に対する欲求」と變つて行つた。

しかし最近における客観条件は、それと逆の方向に進んでいる様に思える。新しい成功の型ないしは条件としての学歴（教育）は、まだ高等教育を受ける人間の少ない間にこそ成功へのパスポートであった。日本の場合それは古い学制の時代までであったと云つていいだろう。中等教育、高等教育が大衆化されるにつれて、その卒業者の相対的値打ちは下るのは当然であろう。かつてのエリート教育時代の華やかな成功は、現在の大学卒業者には殆んど約束されていない。のみならず職場の合理化が進むにつれ、次第にその仕事は単純になる。「教育水準は上つたにもかかわらず、逆に現在ふえつつあるホワイトカラー的職種では、次第に低い教育程度しか必要としない傾向」^⑨にさえあるのである。労働市場が教育を必要とする時のみ、教育は社会移動の手段として、役立つの

であつて、需給のバランスが崩れかけた今、学歴と社会移動の問題には、大きなギャップが出来つたと云わねばならないだろう。(但し教育の需要の減つたのは、主としてホワイトカラー、特にその中でも書記の仕事であつて、専門的技術者は非常な人材不足であるし、ホワイトカラーといへども、一流大学卒の幹部候補者は不足している)。能力以下の仕事しかないところでは、能力のある者も劣つた者も、同じ仕事をせねばならないし、仕事の結果に能力差のあらわれる余地は余りない。しかも地位階梯的ポジションは、基盤の目のようにこまかく組込まれている。とすれば、仕事の上で難易のないポジションのどの目に誰を置かを選考する手つ取り早い識別法は、学歴ということになるであろうが、大学卒が非常に多くなつた現在、単に大学卒というだけでは識別が困難となる。勢い大学の格差や学閥的縁故にまで至らざるを得なくなるだろう。社会移動への欲求は、伝統をもつた一流大学への入試競争へと集中し、今日の社会問題的状况を生んでるのである。同時に又職業選択者の側から云えば、ホワイトカラー的職業の増大と、専門性の稀薄化は、どの企業に就職しても、仕事の内容に余り大差のない事を意味するのであつて、学卒者が就職するに當つて考える選択基準は、前節で述べたように感覚的、ムード的なものとなり、いわゆる有名会社に集中するようになるが、大学に対する求人数においても、給与条件においても、一流大学と無名大学との格差は激しく、立身出世までは望まず、単に有名会社へ入ればよいという程度のアスピレーションしか持たぬ者までも、より格の高い大学へ進もうとする。更にそれすらあきらめた者は、二流会社でも中小企業でもいいから、ホワイトカラーになり、せめて消費面での擬似的一時的上昇移動をはかろうとする風潮を生むだろう。そこに又別な青年期の問題があるが、それについては後の節で述べることとする。

(2) 文化背景 (cultural background) 的要因

職業選択の問題にとつて考えねばならない第2の視点は、文化的背景である。前節での職業階層の成立そのものにも、又社会移動の欲求の持ち方や社会移動の型も、その背景には、その社会の文化が影響を及ぼしている。

なかんずく、文化のエトスとしての価値意識や思考様式は、超自我的に個人の興味や欲求を制限しあるいは励起する。もちろんその内容は、歴史的、文化圏的な広範囲なものから、地域社会や家族背景といった、サブ・カルチャー的なものまで含まれよう。それ等の中で直接職業選択と関係の深い職業観、及び労働・余暇観についての基底的傾向は、ローウエンタールがあげている、労働価値観から余暇価値観への変化であろう。

徳川期の農民にとって働く事は義務であつて、余暇や娯楽は罪悪視させられたし（慶安の御触れ書）、プロテスタンティズムにおいて職業は Beruf（召命）としての贖罪的義務的天職であつた。今日このような職業観・労働観が殆んど影をひそめている事はいうまでもない。それどころか、物を作る事に自己表現的価値を見出す職人氣質や、立身出世を下敷きにした労働観すら薄れていると云えよう。ミルズによれば「かつて大衆雑誌にまで伝記をかかげられ、英雄として讃えられたのは、実業家や専門家、政治家、つまり生産面における成功者であつたが、今では娯楽や消費や余暇の面での成功者がその地位を奪い、映画スターや野球選手が英雄として祭り上げられている」のである。

日本におけるこうした傾向を示すものとして、昭和三十五年、東大新聞研究所で行なわれた労働・余暇観の調査がある。それによれば、余暇と労働を両立させようとする割切つた型が圧倒的であり、労働は余暇の為にあるとする考え方さえ生まれており、特にこの傾向は若い年代に多い。今日では更にこの傾向は強まっているだろう。勿論労少なくして収入の多きを求める事は、或意味で基本的且つ普遍的な欲求であり、それが合理的である限り、むしろ望ましい事ですらある。広い視野に立てば、効率原則は人類の進歩、特に物質文明の発達にとって不可欠のものであつたし、労働運動を根底において支える大衆の意識は、結局のところ労少なく収入の多きを求める心なのである。もちろん自分に向いた仕事、楽しく働ける職場を求める気持も少なからずある。我々の調査でも「自分に向いた仕事」という事は、就職に当つて考える第一条件にあげられていた。しかしそれは職人氣質的

なものでなく、自分に向かない仕事をいやいやするよりも、自分にとってやりやすい仕事の方がいいという事であつて、特に労働を嫌うわけではないが、働くのに辛い思いをする必要はないということなのである。すなわち、出来るだけ労働における苦役を少なくしたいという考えのあらわれであつて「若い時の苦勞は買つてでもせよ」とか「人の嫌がる仕事を進んでせよ」といつた儒教倫理的動機力行型の処世訓は、もはや通用しない。一つの社会的分業としての責任は果すが、それ以上労働を通じて何らかの価値を追求しようという意志はなく、立身出世といった考えからも縁遠い。ましてプロテスタンティズムの労働義務感もない。責任回避的ではないが、責任を出来るだけ早く、少ない労力で、しかもつらい思いをせず果そうというのである。就業時間中にサボルという事までは考えないが、終業時間になればサッサと帰るといふタイプであり、労働と余暇を割切る合理化志向と似た面をもっている。この傾向は職業選択に関して云えば、労働における価値実現とか、職業を通しての社会移動の希求と云つた、何らかの意味での労働志向は影をひそめ、むしろ生活の重心は、余暇―それも自己実現的なものでなく、受動的、娯乐的余暇の面にあり、その為の手段として労働が考えられているといつていいだろう。青雲の志を抱いて大都会へ出てくるのではなく、娯楽機関が完備し、新しい流行に触れ得る憧れの地としての都会が考えられている。職業に求めるものは、収入と、華やかなもしくは、こぎれいな職場という事にウエイトが置かれてくるようになるだろう。まして新しい娯乐的消費的産業の発達の著しい今日、それ等はその外面的ムード的華やかさの故に、職業選択者にとつて、従来の職業格付けを混乱させる。特に後に述べる空想的、興味本位的な職業選択段階(中学卒業期)において就職する者にとつては、その影響は強いであろう。地方から出て来て中小企業の工場や商店に勤めた者が、どんどん離職して娯楽産業に吸収されて行く傾向が強いのはこの事を物語るものであらう。^⑧

更に間接的ではあるが重要な事は、余暇消費的価値観が、先に述べた社会移動の困難さと結びつく時、人々は

職業を通しての上昇移動を求めるよりは、余暇娯楽面で上層階級との身分的同一視を求めるようになるという事である。ミルズによれば「平日の間は職場でも居住地でも、自分の身分を増して通用させる事は困難であるが、月に何回かは良い服を着て、ふだんは行かない料理店に行ったり、劇場の特別室に収まったりする事が出来るし、休暇の旅行を豪華にする事は、更に一層その欲望をかなえてくれる条件を備えている」。こうして年に何回かの見せかけの、そして一時的な身分上昇によつて、果し得ぬ上昇移動への一時的代償を行なうわけであるが、その事が職業選択に対する感覚を少なくし、ひいては、職業は何でもいいから、収入を多く得て余暇消費面で一時的地位移動を求めるといふように、職業意識をも変えるのである。

なおこの他に職業選択に影響を与える文化背景的要素として、性・年令・家族背景等がある。これ等は選択者にとつて、いわばその生み込まれた社会や、家族における変える事の出来ぬ宿命的規定要因としてとられ、選択の枠組みにさえ入れられぬ事が多い。しかし、それだけに社会規範的なこれ等の要因は、個人的な解決の困難な強い制限の枠として作用する。

たとえば、現在の我が国では未だ女性の職業分野は限られている。しかしこれも女性自身が、就職を結婚するまでの一時的なものと考えている事にも原因があり、一面的には論ぜられない。いづれにせよ女性の場合、特殊な分野もしくは高度な能力を有する者以外は、生業的あるいは、社会分業的な意味での職業というには遠いようである。したがつて、女性には女性特有の職業選択上の問題があるであろうが、今回は主として男子について考えることにして、これ以上立ち入らないことにする。第二の年令の問題は、我が国の場合特に中高令者の転職、および再就職の困難という形であらわれている。これには我が国の終身雇用的雇用形態と、年功序列的賃金形態が大きく作用していると思われるが、一方、意識面で、転職を、ある会社や職業での不適格者ないしは、落伍者と見る考え方にも大きく影響されているだろう。アメリカのように職をかえる事はむしろ才能のある証拠である、

とすら見られるところとは大きな違いがある。しかしこの問題も、本稿では主として学卒時の問題を中心にしたので、余り触れないことにする。その他地域的な差や、父の職業と労働観の関係、出生順による制約(たとえば我が国では従来長男が家の業を継ぐ傾向が強かった)等の問題がある。二、三の例をあげてみると、たとえば、農村では都市の生活への憧れから、都市的労働への志向が強い傾向が見られ、そこでの長男は旧来の規範と欲求との葛藤に悩むであろうし、父の職業と子の労働観の関係では、同じ都市にありながら、ブルーカラーの子どもは、ホワイトカラー的職業の子どもに比して、肉体労働を高く評価する傾向のある事が報告されている。父の日頃の労働を通して、直接的に物を生産する事に高い価値をおくようになるという事を示すものとも考えられるが、いづれも断片的である為、今後にまたねばならない。したがって、ここではそうした事実を指摘するに止める。

(3) 個人的・心理的視点からみた枠組

職業選択の問題に対する第三のアプローチとして個人を中心に据え、行為理論的な枠組から考察しようとする方法が考えられる。

その視点からするならば、職業選択はまさにその選択という点において他の強制的行為、習慣的行為、衝動的行為とは明確に区別される主体的行為であるはずであるが、慣習や物質的外部要因等によって、主体者である選択者の意志は、様々に屈折させられ、時には目に見える強制を受けたり、慣習に流されたりする。というよりは本来的な主体性が、次第に失なわれて行く傾向にあるのが、現代社会の、現に青年達の職業選択の姿であると考えられる。

今仮りに選択を様々の外的条件を克服し、あるいはうまく調整して、自分の主体的意志を貫いて行くような選択を積極的選択と名付け、外的条件の故に本来の意志を貫徹せず、不本意ながら意志の外にある限られた選択肢のいづれかを取らざるを得ない場合、たとえばよくいわれる「デモ・シカ先生」の場合等を、消極的選択と呼ぶ事

にすれば、現代ではこの消極的選択が次第に広がりつつあるように思われる。もちろん両者に質的な区別はない。いかなる職業選択にも何がしかの不満は残るであろうし、又誰しも始めから消極的選択を行なうのではなく、積極的選択をなし得ずして消極的となるものである。

いづれにせよ、よここではまず積極的選択について考察を進める事にする。職業選択における個人の側に属する要因は、

- (1) 職種、あるいは仕事の内容についての興味
- (2) 自己の能力の評価（および教育意欲）
- (3) 価値意識（職業観・労働観・人生観等）
- (4) 職業分野についての認識

の4つが主なものとして考えられよう。この主体の側の条件が、客体的所与としての職業階層と、普遍的な社会的欲求としての社会移動への欲求とからみ合せて、様々の選択がなされると考えられる。しかし常にそれ等が同じウエイトで評量されるのではない。人間の発達段階によつても、ウエイトの置かれ方は変化する。たとえば、E. Ginzberg による発達心理学的選択段階⁽⁵⁾に、日本の教育課程を補足して表示すれば次のようになる。

- I 空想的選択 (fantasy choice) 少年期(小学校段階)
- II 試験的模索的選択 (tentative choice) 青年前期
 - 1 興味段階 (interest stage) 中学入学
 - 2 能力段階 (capacity stage) ↓(青年中期)
 - 3 価値段階 (value stage) 高校卒業
- III 現実的選択 (realistic choice) 青年後期
 - 1 模索期 (exploration) 高校卒業(大学入学)
 - 2 結晶化 (crystalization) ↓
 - 3 特定化 (specification) 大学卒業

Ⅰの空想的選択は、子どもたちが、野球選手や歌手になりたいと思ったりするような、或いは又、戦前の男の子ならたいてい一度は軍人になりたいと思つた事がある、というような選択と云うに似せぬ程度のものである。リンカーンの伝記を読んで立派な政治家になりたいと思つたかと思うと、次は野口英世の伝記を読んで、医者になりたいと思うというように、自分が将来就こうとする職業としては考えられていないという方が正しいであろう。しかし中学へ入る頃になると、少なくとも自分の持っている興味が、将来の職業と関連して考えられるようになる。機械いじりが好きだから理工科方面に進もう等と考へ得るようになる。しかし、略同じ頃に自分の能力についての認識が高まり、同時にその能力を高める為に、学習の必要な事がわかつてくる。今まで単に先生や親から強制的にさせられたり、何となくしていた学習が、将来と結びつけられて、とも角現在の仕事は勉強する事だと、職業的目標は未だ明確でなくとも、自発的な学習が始まるのもこの頃からであろう。と同時に小学校に比して格段に難しくなつた教科内容や、系統的な学習方法の故に、自分の能力の限界を知り始めるのもこの頃である。漠然としてではあるが、社会移動への希望を失ない、どうせ自分の将来には勉強は不用だと、娯楽的な方面に心に向いてしまう者も出ようし、又特殊な能力を持った者(特に身体的運動能力的な面では、略中学卒業頃にははつきりとあらわれて来る)が単純ではあるが、かなり明確な職業の選択を行つたりする。但し、未だ他の多くの職業分野や職業階層についての認識もなく、価値意識も明確でない為、後になつて困難を招く事も多いし、事志しと違ふ事態にたちいたる事も多いだろう。又中学卒業と同時に就職する者は、自分で主体的に選択する条件が整わないまま、現実的な選択を迫られるわけであつて、中学卒業者の職場定着率の悪さの一因は、あるいはこうした事情にもよると思われるが、それは今後研究すべき問題としたい。次の価値段階は、たとえば人生観、世界観の形成等、いわゆる内的沈潜の時代にあたる。哲学書や文学書に接近し始めるのもこの頃であつた。旧制高校はちようどそのような段階に適合した制度であるが、現代高校生は受験や就職等現実的な問題を身近かに控えて、

その余裕が少ない。職業選択を含めた進路選択のもつとも中核的時期が、このような制度的条件によって乱される事に、実は次節で取りあげようとする種々の問題点が、集中してあらわれる原因があるように思われる。もちろん逆に言つて、切実な現実的問題を控えるだけに、選択に対する真剣味が増し、少年期からの空想的選択の残渣が拭い去られるという積極面もあるだろう。たとえば子どもの時の軍人になりたいという単純な外見的憧れが、多少とも国家の防衛という現実的な役割の認識、更には愛国心といった価値観ともつながったものとなる。すなわち高校卒業という制度的に動かし難い外的条件に適応して、何らかの価値態度を早く形成し得るか否かが、職業選択面でも重要な事となるのである。極端に云えば、現在の一つの風潮であるマイホーム主義的態度は、この時期における価値の探求の不足に原因するとも考えられよう。

しかしこの段階では、種々の外的条件と、自己の興味や能力を探索し評量して、長い時間的視野のもとに最適条件を見出すという、現実的な選択にまで至る事は少ない。したがって、中学卒業者程ではないが、やはり不安定性はまぬかれないだろう。ただそれが現実之余り問題とならないのは、高校を卒業して職につく者には、いわゆる専門的職業につく事は少なく、又大学へ進学する者にとっては、種々の現実的条件の評量は、大学に入ってからに持越されるからであらう。すなわち、真の意味での現実的選択は普通ならば、大学の学科選択の段階以後になる事が多いが、そこにもやはり多くの問題点がある。しかしその問題には、個人の発達心理的要因以外のものが多く関与すると思われるので、次節で具体的に述べる事にする。(未完)

注① R. J. Havighurst, Human Development and Education, 2953.

I, Cole, Psychology of Adolescence, 1949.

D, Gottlieb and C. E. Ramsey, The American Adolescent, 1964 等参照

② J. S. Coleman, The Adolescent Society, 1962

E. A. Smith, American Youth Culture, 1962

現代社会における青年期の問題(野村)

なお以下の問題については、筆者も「都市高校生の生活態度と価値観」教育社会学研究第二二集に於て触れておいた。なおそれらに共通してあげられていることは

- 1 異性間の関心の確立
- 2 両親からの情緒的独立ないしは解放
- 3 男性又は女性としての役割の受容
- 4 経済的独立の準備
- 5 社会人としての資格を得るに必要な知的、技術的能力の発達

- ③ T. Parsons 等によれば役割、報酬、便益等の配分は、社会体系の統合、目標達成と強い相互連関を持ったものである。
T. Parsons et al., *Toward a General Theory of Action*, 1952. 永井他訳「行為の総合理論をめぐって」p7. 311~331.
特に「報酬の配分」(pp. 310~321) 参照

- ④ K. Davis and W. E. Moore, *Some Principles of Stratification*, *American Sociological Review*, Vol. 10 (1945), pp. 242-49.

- ⑤ 田崎仁「職場心理学」昭和三八年 p. 410 及び pp. 159~160 参照

- ⑥ 田崎仁、前掲書 p. 40.

- ⑦ C. W. Mills, *White Collar*, 1951. 杉正孝訳「ホワイトカラー」pp. 225~25.

- ⑧ 競争移動 (contest mobility) は庇護移動 (sponsored mobility) に対置させた用語として R. H. ターナーが理念的に用いたものである。

Education, *Economy, and Society*, ed A. H. Halsey et, als 邦訳 経済発展と教育 pp.63~91. 参照

- ⑨ C. W. Mills 前掲邦訳書 pp. 252~54.

- ⑩ C. W. Mills 前掲邦訳書 p. 219.

- ⑪ 岡部慶三「娯楽志向と生活様式の変化」思想四三〇号(昭和三五年五月) pp. 51~59.

なお、その後この調査を原型とした調査が数多く行なわれている。例えば「現代の子どもの理解とその指導に関する研究」

大阪府科学教育センター、昭和四二年 参照

- ⑫ 調査の枠組については拙稿前掲論文参照

高卒就職者が考慮に入れる条件は次表の通りである。

	会社の安定性	自分に向いた仕事	職場のふん囲気	収 入	サンプル数
男	一四、六%	七五、一	四、九	五、四	一八五
女	一〇四	七七、三	九、四	三、三	三九七

⑬ 青少年白書 一九六六年版 pp. 136～7 参照

なお転職理由としては「家事都合」について「仕事がつらい」「仕事がおもしろくない」が22%を占めている。労働白書 一九六七年版 pp. 72～3.

⑭ C. W. シルズ 前掲邦訳書 pp. 230～42.

⑮ 大阪府科学教育センター前掲書 pp. 224～232, 及び pp. 7～23.

⑯ Eli Ginzberg, et al., Occupational Choice: An Approach to a General Theory, 1916.